

協励アカデミー 令和4年度 第2回漢方・皮膚セミナーレポート

開催日 2022年(令和4年)8月7日(日)

開催方法 Zoomでのオンライン開催

●漢方

指導講演

宮城・大野薬局

阿部 孝英先生

「処方決定のコツ②」

●皮膚

指導講演

千葉・一心堂薬局

佐藤 勝利先生

「皮膚病の基礎知識」

2022年(令和4年)8月7日(日)午後0時より、協励アカデミー令和4年度第2回漢方・皮膚セミナーがZoomにて開催されました。今回のセミナーでは総勢108名の出席がありました。

はじめに「協励十訓」の唱和の後、佐野智会長より開会の挨拶があり、「協励会には研修に始まり研修に終わるとい言葉がありますが、『皮・美・漢』は特に重要です。これに上手く対応するためには、自己研さんによる努力が必要です」とお話しいただきました。

まず最初の指導講演である漢方の部は、「処方決定のコツ②」という演題で宮城・大野薬局の阿部孝

英先生にご講演いただきました。本題に入る前に、漢方医学を学ぶコツとして、「西洋医学から漢方医学の考え方に切り替え、頭を柔らかくすること」などが必要であるとのアドバイスがありました。

・方を決めるには

「凡そ薬方を用ひんとするに、これ亦二道あり。一なるものは薬の気味に基づきて其の方を主治する所以を知ることなり。二なるものは証に依りて其の方を主治する形象を知ることなり」(『方術説話』)。つまり証による処方理解だけではなく各生薬の漢方的な理解をし(薬理)、身体の中なかで変化があることで病になる(病理)と理解する。

・そもそも「証」とは

証:病は経脈を通過して表に出ることであり、逆の道をたどって薬で治す。証は源を探り当てるための手がかりである。具体的に、葛根湯の証は無汗であり、寒のために表が閉まる(病理)、葛根湯(麻黄)が閉じた表を開く(薬理)。証から病源を知る

には、望(診)・問(診)・聞(診)・切(診)を行う。これが検査にあたる。

・「証」の構成

虚実……勢い:病の虚実であって、体質ではない。見かけの体力の有無ではなく、病の虚実で判断する。寒熱……状態:容態の寒熱と病因の寒熱を区別する。虚熱・実熱、虚寒・実寒を見極める。

・新病と旧病を区別する

もともと持っている症状(旧病)が、新しい症状(新病)を悪化させることがある。新病を先に治療してから旧病の治療にあたる。

・生理の漢方での役割

通常、胎児が体内にいるものとして、血をため定期的に外に出すと考える。そのため、妊娠中は生理が止まる。生理が遅れる・出血



佐野智会長



宮城・阿部孝英先生



千葉・佐藤勝利先生

が少ない場合、血が足りないと考え、生理が早い場合は瘀血^{おけつ}がある^{おけつ}と考える。瘀血がある患者は、更年期障害になりやすく、瘀血があるとき、「おなか^{おなか}が張りやすい」と訴える患者さんが比較的多い。

以上の内容をご自身の経験談とともに、手書きの模式図などを用いて丁寧に解説していただきました。

続いて皮膚の部は、「皮膚病の基礎知識」という演題で、千葉・一心堂薬局の佐藤勝利先生にご講演いただきました。

冒頭に、「皮膚病の基礎知識、皮膚の断面的な構造を理解し、(患者の)皮膚の裏側で何が起きているか想像できるようになることが重要」とアドバイスされました。

・皮膚の構造

多数の写真やイラストにより、暑さ、寒さ、紫外線、刺激物、毒物などから身体を守る働き、また体内の水分、体温の調節を行う皮膚の断面的な構造、ターンオーバー、タイトジャンクション(バリア)について解説。

・皮膚の炎症

皮膚の炎症のメカニズムと、写

真による症例の紹介。身体が有害な刺激を受けたときに、これを取り除こうとして防御する反応が起こる。反応の起きている場所は熱をもち、腫れ上がり、赤みがさし、痛みを感じる。赤くなっている部分は、痒みの物質を抑える抗ヒスタミン剤の使用、物理的にぬれたタオルなどで冷やす等の対応を行う。皮膚炎がひどくなると、毛細血管が拡張し透過性が増大、痒み神経への刺激が増大する。

・汗腺

汗腺の構造について生化学的な説明。汗腺は、全身に分布するエクリン汗腺と、特定部位にあるアポクリン汗腺の2種類があり、汗により体温調節を行う。汗腺が原因で起こる汗疱^{あせも}と汗疹について解説。

・自由神経終末

痒み、痛み、温度などの刺激を感じ脳に伝える神経で、皮膚の神経繊維の末端で細くなって終わる。イッチ・スクラッチサイクル(痒みのサイクル)の解説。

・赤血球

赤血球は、血液の血球成分のほとんどを占めている赤い血球で、1日

2,000億個つくられる。痒みがあると集まり、時間が経つと色がくすむので、皮膚の色を見ることで、その皮膚疾患の発症時期を推測できる。

・基剤の選択

ワセリン、親水軟膏(クリーム)、プラスチックベースなどの基剤があり、湿疹、皮膚炎が起きている皮膚の状態によって適切な基剤を使用する。ワセリン:皮膚温が上昇すると痒みが増す患者さんへの使用には注意。皮膚温が上昇している入浴後に塗布する場合は、身体を冷やしてから塗布するように指導。

親水軟膏(クリーム):刺激があるので、皮膚面に傷がある患者さんへの使用は注意。

プラスチックベース:刺激が少ない。

と、基剤の特徴を解説。

以上、多数の症例写真とイラストを用いた解説がなされ、皮膚病が苦手な先生方も店頭での対応に活かすことのできる内容だったと感じました。

(レポーター 学術研修委員 平松純)